

『砂漠』

伊坂幸太郎著／新潮社

伊坂幸太郎は、最初、大学生の娘に実質的な処女作である「オーデュボンの祈り」を勧められ、その後、ほとんど全ての作品、文庫本、単行本で出版されているものを読破した。その中で、一番のお勧めが「砂漠」である。そもそも名著であっても、青春時代に読まないとその若々しい感性に反応しない本がある。例えば、一昔前ならばサリンジャーの「ライ麦畑でつかまえて」や夏目漱石の「こころ」がその類であろう。この「砂漠」も学生時代に出会っていればもっと感動しただろうという本である（それでも、私も大いに楽しんだのだが）。実際に、大学生である私の娘と息子は絶賛している。

入学した大学で出会った5人の男女が、様々な出来事や事件に出会い、共に経験したことで互いの絆を深め、それぞれ成長させあっていくという青春小説である。モラトリアムとしての学生時代を謳歌する学生達が、比喻としての『砂漠』という厳しく苛酷な『現実の社会』へと出ていく前の様々な出来事を描いている。登場する5人はそれぞれ个性的に描かれている。話し手としての主人公北村が、当初は醒めた性格で物事を俯瞰的に見ていたのが、徐々に変わっていくのだが、そこには何事にも熱い西嶋という同級生の言動が大きく関わってくる。この西嶋は『砂漠に雪を降らせるような試み』に真剣に取り組み、世界平和を祈るために麻雀では、ひたすら「平和（ピンフ）」をあがろうとする。実は5人のうち4人には麻雀につきものの東西南北が名字に入っていたりする。

伊坂幸太郎の本は、ほとんどの作品が伏線を綿密に張りめぐらし、それを後ろの方で回収するという巧みなプロットで構成されているが、この作品もまさにその通りである。また、春、夏、秋、冬という章で構成して、大学生活を季節ごとに追っているのだが、これは一年生の時の話と信じ切っていると、著者の罫にはまっていることに最後に気がつく。一年の春、二年の夏、三年の秋、四年の冬の話なのである。読んでいる最中に、時間的に違和感を抱いていた部分が最後に晴れ晴れとした気分とともに、解決する。

とにかく、自分自身の置かれた境遇、環境がシンクロできる学生時代に読んで感動して欲しい本である。昨年末に発表された「今、読みたい新潮文庫2012年」で第一位になっているから、私だけの思い込みではないと思った本である。

他にお勧めできる伊坂幸太郎の本（実はどれもおもしろいのだが）

- ・オーデュボンの祈り 今読みたい新潮文庫2009年の第一位、一風変わった推理小説？
- ・ゴールデンスランバー 首相暗殺の濡れ衣を着せられた男の二日間に亘る逃亡劇

執筆者紹介

中出 文平

環境・建設系教授。専門領域は、都市計画（土地利用計画 地区計画）。

【書名】 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『砂漠』伊坂幸太郎著 新潮社（新潮文庫） 2010年 780円

『オーデュボンの祈り』伊坂幸太郎著 新潮社（新潮文庫） 2003年 704円

『ゴールデンスランバー』伊坂幸太郎著 新潮社（新潮文庫） 2010年 900円

[ブックガイド目次へ](#)